

## 中国・河南省の石窟寺院を訪ねて

当館学芸部情報サービス室長 岩井 共一

今年の八月上旬、河南博物院（河南省鄭州市）との学術交流で、中国に派遣され、中国・河南省の石窟寺院を見学させていただく機会に恵まれた。河南省には、世界遺産の洛陽・龍門石窟をはじめとして、岩壁に穴を掘って仏像を彫り出した石窟寺院がいくつも存在し、中国仏教美術史上重要な文化遺産として知られている。中国では、長い歴史の中で、災害や戦乱、廃仏によって、多くの仏像が姿を消した。木造仏は焼かれ、塑像や乾漆像は崩れ去り、銅の仏は溶かされて貨幣などに姿を変えた。しかし石の仏は、その堅牢な材質ゆえに、多くの数が残されている。中国では、近年のめざましい都市開発によって、地中から多くの石仏が発見され、石仏の数が増えてきた。しかし、これらの石仏以上に石窟の価値として重要なのは、造られた場所に刻まれている当初から場所を移動しないことだ。石窟は、造られた「場」との関係を確実に有し、制作地域の様式を間違いなく示している。だから重要なのである。石窟は基本的に移動しない。だから現地まで見に行かなければならない。写真や図面では実感できない大きさや空間を体感したい。そう意気込んで中国に渡った。

今回訪れた石窟の一つに、洛陽から八〇キロほど東にある鞏義石窟寺（鞏義石窟寺とも言う）がある。北魏代（六世紀前半）に造られた優美な仏像が数多くある石窟で、以前から行ってみたかったところだ。

今回は河南省の省都・鄭州からこの石窟に向かった。ところが目的地に近づけども、仏像がありそうな岩山なんかどこにも見当たらない。この辺りは黄河の流域で、一帯は、黄土色の粘土質の土地ばかり。こんな場所のどこに、石窟寺院があるのだろうか。そう思っている内に、突然目的地に着いた。目の前には、同じような土の崖が見えるだけだ。しかし、その山の崖のふもとに、目的の石窟はあつ



中国・河南省鞏義市石窟寺 崖の下の屋根で覆われた所に石窟は存在する。

た。そこだけ岩壁が露出しており、石窟が彫られ、びっしりと磨崖仏（レリーフの仏像）が刻まれていた。この石窟だけで分厚い美術本一冊が刊行されるほど多くの石仏が彫られているが、規模的には拍子抜けするほど小さい。

河南省にある石窟寺院は、龍門石窟を除くと、どれも小規模である。それもそのはず、大規模な石窟を造れる岩山がそこら中にあるわけではないのだ。一方で岩壁があれば仏像があるかというところでもない。河南省には、少林寺拳法で有名な少林寺があり、その近くには嵩山という立派な岩山があるが、ここには石窟はない。要するに「どこにもあるもの」ではないのだ。

中国全土には有名な敦煌莫高窟など、石窟寺院が各地に存在している。そこに刻まれている仏像の数を全部数えたら、膨大な数になるだろう。しかし、あの広大な中国の国土から見れば、それらは、ごくわずかな存在でしかない。それに、我々が見ることが出来る石窟の仏像は、かつて中国で造られた同時代の仏像（金銅仏や塑造仏など）の分量から見たら、水山の一角にすぎない、稀少な遺物である。だから重要なのだ。専門家にとっては自明のことかもしれないが、ようやくたどり着いた石窟の前に、今さらながら、石窟寺院の貴重さを改めて思い知らされたのである。しかし、ただ有り難がっている場合ではない状況も目の当たりにした。窟内の雨漏りや水分による窟内の石質劣化らしき現象をいくつかの石窟で見かけた。昨今の大气汚染など環境の変化と関係があるのかどうかは知らない。しかし、これらの極めて貴重な文化遺産の保護活動は、待ったなしの状況が迫っているように思われた。